

靖国街道



一軍医のビルマ戦 回想

■ 中野 信夫 著

国街道 ■ 一軍医のビルマ戦回想

靖国街道

— 一軍医のビルマ戦回想 —

昭和五十二年一月二十日 印刷
昭和五十二年一月三十日 発行

著 者 中野 信夫
発行者 宮田栄次郎

京都社会労働問題研究所
京都市下京区寺町四条下ル
京都労働会館内
発行所

TEL 京都(〇七五)
二五五一四三六六

©1977 NOBUO NAKANO

(印刷・製本 日本写真印刷株式会社)

靖国街道
目次

はじめに 3

「百三八」 南方へ（昭和十八年一月～五月） 5

太平洋の戦局 5 南方へ出発 8 高雄寄港 10 一路南
下 11 水葬 13 昭南上陸 14 その部隊、発車待て！ 15
マレーの風物 17 クワラクプの思い出 19 ゲリラの活躍 21
クワラルンプール市のマラリア対策 22 悔悟 24 クワラクプ
の祭り 26

ビルマへ転進（昭和十八年五月～十九年三月） 29

ビルマへの出発 29 大トカゲに驚く 31 ビルマ進攻作戦の成
功 33 チェーズ テン バレー 37 第十五軍（林）の編成 40
B 25の編隊 41 ビルマの雨期 42 原始林での野宿 44 蚊
のカウンカシ 46 内地へのハガキ 47 「太郎」の出現 49 レ
ウの爆撃 50 ビルマの田園風景 53 ヤナンの一日 55 ビル
マの天然痘 56 夜の時報 57 ビルマの青年モン・パッセ 59
村落通信 60 村長会議 61 峠の泉 62 カウンカシの空
襲 62 チンドウイン河畔へ 64 ウインゲート挺進隊 66
ウ号作戦準備 69 柴崎少佐との最後の対話 70

コヒマへ突進（昭和十九年三月～六月） 73

矢は弓を離れたノ 73 英軍司令官スリム中將の戦略 76 峻嶮
アラカン 78 ドブロクの接待 80 アラカンをよぎり西へ 81
標高二千五百メートルのジャンゲル 84 カラソム陣地奪取 85
敵陣からの不意打ち 87 第二大隊の本格攻撃 90 イギリスた
はこ「ビクトリー」 91 コヒマ村落で 93 病院陣地攻撃 96
カタピラの音に緊張 98 漆黒の中の白兵戦 99 コヒマ英陣地
の一週間 101 穴倉の生活 115 山蛭 117 砲撃 118 全滅 120
挫折した夜襲 124 撤退命令 127

コヒマ撤退(昭和十九年六月〜十二月).....

135

現地人の抗議 135 カラソムーウクルル 138 上野軍曹の戦
死 140 金米糖 141 靖国街道 自爆の続出 144 地獄で鬼 146
西田中尉の最期 147 爆撃の洗礼 148 当時の敵味方の位置 151
病院即墓場 154 酸鼻、担架上の死体 156 命令のない患者隊
長 157 メイミョウ兵站病院の二週間 160 追及 162 サガイ
ンの医務室 163 サガインへ敵戦闘機 165 敗残の姿 166 水
野軍医のマリア 167

イラワジ会戦とその後(昭和二十年一月〜八月).....

169

定期便の飛来 169 じゅうたん爆撃 172 第六中隊の壊滅 175
生き残った者もいた 176 サガイン・ヒルへ上がる 178 孤立し
たサガイン・ヒル 179 上久保隊、敵戦車を阻止 181 戦車と歩

兵の連携攻撃 182
 西に南に戦車を迎撃 184
 ミッタの対戦車戦
 闘 186 電撃性コレラ 191 シャン高原へ登る 192 敵飛行機
 からの宣伝ビラ 193 黒石と白石 196 モチの山越え 196 第
 二の白骨街道 198 硝煙の船着き場 202 きゅうりの塩もみ 203
 鷲田山土俵入り 204 必勝部隊と敢闘部隊 206

日本降伏・内地帰還（昭和二十年八月～二十一年七月）

日本降伏を伝達 209 ビルマ人の人情 211 「三八会館」の提
 唱 214 ビリン架橋工事 215 作業参加の一日 217 佐藤隊長
 の手腕 219 医務室 220 子供の手の手術 221 従軍記念品 222
 完工式 224 内地へむけ出帆 224 亡くした遺骨 226 復員船
 の二週間 226 潮風 228 水葬 229 日本が見える 231 内地
 の土を踏む 231 復員列車 232 家がない!! 233

あとがき

娘の読後感 237 佐藤、牟田口両將軍の功罪 240 筆をおくにあ
 たって 241

靖国街道

——一軍医のビルマ戦回想——

はじめに

本書の題名『靖国街道』は、畏友横村庄一郎氏から、「小見出しの『靖国街道』の前後は、鬼気せまるものがある……」と評していただいたのにヒントを得て命名した。

『靖国街道』を執筆した動機は、歩兵第三百三十八聯隊のビルマ戦回顧録の出版にあたり、私も、今なお忘れ難いくつかの場面を、寄稿するためであった。記憶が薄れ、文章にならぬところを、戦友川北恵造氏からの詳しい資料に助けられ、日を追って書き進むうちに、次から次に記憶がよみがえり、ビルマ三年間の回想は三百枚にもなった。心に浮かんでくるままに描いたさし絵も四十枚を越えた。

書き初めは、世にも珍しい体験や数々の思い出を懐しんで書き出したのだが、書き終わる頃には、インドの辺境アラカンのジャングルの中で、あるいは峻嶮モチの山々で、飢餓とマラリアで、バタバタと倒れて行った何万という兵士や看護婦さん

の切ない心情、怨念を書き上げて、この戦争の実相を、一人でも多くの人に知ってもらわなければならぬと思えてきた。

それが、体験のない世代に戦争の実態を伝え、権力者や野心家たちがどんなに上手に宣伝しても、若人は決して銃は執らないと決心してもらうために、いくらかでも役立つことになればと思う。

もしそのように読まれることになれば、望外の幸せである。

「百三八」南方へ

(昭和十八年一月～五月)

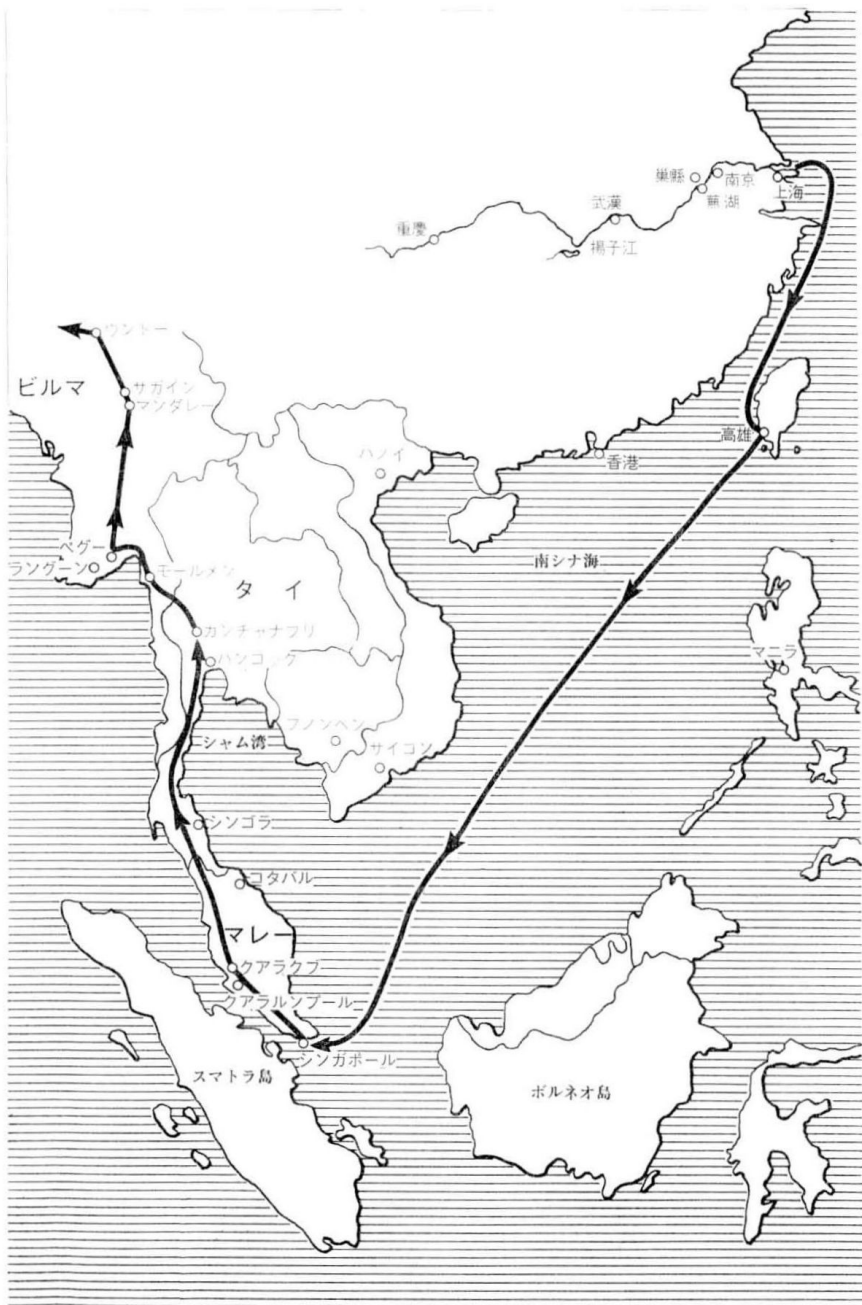
太平洋の戦局

昭和十六年一月、私は召集されて京都の陸軍病院へ、九月には奈良の歩兵聯隊へ転属させられ隊付軍医として勤務した。揚子江中流の南岸、池州に駐留していた「百三八」(歩兵第百三十八聯隊のこと)に軍医の欠員が生じ、私は命じられて奈良の聯隊からそこへ単独で赴任した。

広島から上海行きの貨客船に乗り合わせた十数名の船客が甲板に整列し、宮中席次の一番高い一中尉の号令で皇居遙拜をして、正月雑煮を祝ったのを覚えている。

昭和18年	1月27日	上海出港
〃	1月31日	高雄寄港
〃	2月10日	シンガポール上陸
〃	2月13日	シンガポール出発
		クワラクブ到着 (3カ月間滞留)
〃	5月1日	ビルマへ向け出発

次ページの地図参照



当時の南方戦局



それからまる一年たって、昭和十八年正月に再び上海から外洋船に乗せられた。今度は「百三八」が中支から南方へ転進したのである。

その一年間に東亜の戦局は大きく変わってしまった。昭和十七年六月、「百三八」が杭州から浙贛作戦（浙江省の杭州から湖南省の株洲に通じている浙贛鉄道沿いの掃討作戦）に出る頃、ミッドウェーの海戦で日本海軍の虎の子空母四隻が、一挙に撃沈されたというニュースを聞いた。これは、日本軍の太平洋での制海権が揺らぎ始めたことを意味した。

八月にはガダルカナルに米軍が上陸し、ニューギニア、オーストラリア方面の日本軍前線拠点を脅かし、また太平洋のど真ん中ギルバート群島のマキン島へはニミッツ提督の海軍が進出した。

一年間に、連合軍反攻の大波は西へ西へと押し寄せた。

さらに私たちがマレーへ上陸し、熱地訓練を受けている十八年四月には、山本五十六大將の乗機が米軍に撃墜されるし、アリューシャン群島のアッツ島にも米軍が上陸し、守備隊は玉砕するという背筋の寒くなるような状況となった。

私たちを乗せた輸送船が、中国大陸沿岸を通ってから一年後には、敵の潜水艦による撃沈が相次ぎ、日本軍の輸送船は、四隻の内一隻しか目的地に着かなくなってしまうていた。

軍隊・軍需品の大動脈を切断されて、ビルマはもちろん東南アジア各地で戦っている出先の日本軍を、逐次消耗させていったのであった。

以上、戦局概要は昭和十八年四月以降まで書き及んだが、本文は「百三八」が上海を出発する時点（昭和十七年暮）から始まる。

南方へ出発

昭和十七年の初冬、「百三八」は浙かん作戦を終え、第二大隊は蕪湖の対岸、巢縣地区の警備に当たっていた。この期間は、半年にわたった浙かん作戦と、次の作戦の間の部隊整訓の時期でもあった。

やがてこの巢縣で昭和十八年の正月を迎えたが、この年の正月は餅もあり、形だけながら、おせち料理の配給もあった。元日の夜は第二大隊の将校が集まって酒宴が開かれ、鷺田義三大隊長おはこの白頭山節も出た。

白頭山に 積もりし雪は

とけて流れて 鴨^{ありなれ}緑江の

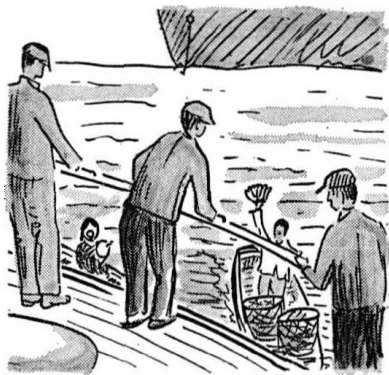
可愛い乙女の 化粧の水

巢縣での正月は、戦場での最後の恵まれた正月であった。まだ正月気分の漂う中で、高田聯隊長に代わり鳥飼恒男聯隊長が着任。「百三八」は宮崎支隊に編入され南方に行くことになった。

新しい任地はいつたどこか？ 南方というだけで、確かなことはわからない。不安と期待が部隊中に交錯する。

期待の中には、ジャカルタへ行くのだという推測もあった。予備士官学校の教育をジャカルタで受けてきた将校の話によれば、そこには砂糖あり、チョコレートあり、鶏の丸焼きあり、それは中支の生活に比べて確かに天国のように思えた。

一月十五日には、三百トンくらいの貨物船に乗って揚子江を下り、上海に集結した。



高雄港での物売り

市街からだいふ離れた殺風景な呉淞^{ウーソン}の兵舎に、外出禁止で南方への輸送船を待った。敵潜水艦が南支那海に出没し始め、撃沈される輸送船があるので、防諜上外出禁止であった。やがて私たちの前に現れた輸送船は、三、四千トン級の四隻で、小雪のチラつく寒い日に乗船した。上海を出港した船団は、台湾の南端高雄港に立ち寄った。

高雄寄港

港外には撃沈された輸送船が、波間に斜めに煙突やマストを醜くさらしていて、みんなをギクリとさせる。

船が高雄港に入り、棧橋に近づくと、小舟が何隻も寄って来て、輸送船を見上げ、バナナやザボンをかざして大声で売りつけている。バナナやザボンは珍しいのだが、甲板からこれを見おろす将兵の反応は鈍く、売買はあまりない。

船は接岸したが、用務ある者以外は下船禁止である。病院への連絡のため下船した私は、高雄の市内を歩いた。中支の戦地を走り回っていた私には、デパートがなつかしかった。